

被災地域の高校生（宮古高校、山田高校、久慈東高校、岩泉高校、宮古北高校）の思い・考え（2011～2021年）

【セレクト1】（全5枚、15編）

実施年度（実施した高校名）

『題名』 番号）（内容の分類） 『体験』：被災体験と伝承

『環境』：身近な自然環境を活用した防災・減災

『支援』：国際支援・国際交流

『生き方』：これから私ができること

平成23～26年度（宮古高校）

- 『私が考える（できる）国際協力や支援活動』 01) 体験・環境・支援・生き方
- 『私が考える（できる）森林保護』 02) 体験・環境・支援・生き方
- 『3.11から三年目の今、私ができること』 03) 体験・環境・支援・生き方
- 『3.11から四年目の今、私ができること』 04) 体験・環境・支援・生き方
- 『東日本大震災を後世に伝える方法』 05) 体験・環境・支援・生き方

平成28年度（久慈東高校）

- 『3.11から5年を経た今、私ができること』 06) 体験・環境・支援・生き方

平成28～30年度（山田高校）

- 『3.11から5年を経た今、私ができること』 07) 体験・環境・支援・生き方
- 『東日本大震災から8年目の今、
私ができること』 08) 体験・環境・支援・生き方

『東日本大震災から8年目の今、

私ができること』 09) 体験・環境・支援・生き方

『インド洋大津波や東日本大震災を

後世に伝える方法』 10) 体験・環境・支援・生き方

『身近な自然環境を活用した

津波への防災・減災』 11) 体験・環境・支援・生き方

『身近な自然環境を活用した

津波への防災・減災』 12) 体験・環境・支援・生き方

令和元年度（岩泉高校）

『私ができる国際支援活動』 13) 体験・環境・支援・生き方

令和2年度（宮古北高校）

『身近な自然環境を活用した防災・減災』 14) 体験・環境・支援・生き方

『東日本大震災から十年目の今、

私ができること』 15) 体験・環境・支援・生き方

01)平成 23 年度宮高 3 年 S さん(宮高 2 年) 『私が考える(できる)国際協力や支援活動』

私が考える国際協力とは、ただ物資を送るということではないと思う。お互いがお互いを助けたいという気持ちを持つことこそが国際協力なのではないかと考える。

今、世界では紛争が起きていたり、飢餓で苦しむ人がいたりとたくさん問題を抱えている。そして、3月11日に東日本大震災が起き、支援が必要な人が大勢いる。大震災を経験し、人の命の尊さ、今までの自分の生活がどれだけ贅沢だったかなど様々なことを考えさせられた。中でも強く思ったことは、協力し合うことの大切さだ。避難所にボランティアに行ったおり、外国のボランティア団体も多く見かけた。その中の1人がおばあさんの肩をもみ「僕らがいるよ」と片言で話しかけていた。そしておばあさんが「力になりたいって思ってくれることが一番うれしいよ」と言っていた。私はその通りだと思った。確かに、物資の支援がとても大切で、物資がないと生きていけない人もたくさんいると思う。でも、力になりたい、助けたいと思うことが支援される側も一番嬉しいと思うし、その気持ちが一番大切なことだと思う。力になりたいと思う気持ちから国際協力は始まっていくので、その気持ちを持つことが大切だ。

世界には、まだまだ知らない問題があると思う。私は問題を知り、理解することから支援につなげていきたいと思った。

02)平成 23 年度宮高 3 年 Y さん(宮高 2 年) 『私が考える(できる)森林保護』

森林保護について、私は、木の伐採に規制を設けるべきだと考える。現在、世界中の森林が減少しつつある主な原因は、人間による森林伐採である。建築資材として、紙の原料として、木材は私達の生活に欠かせないものであるが、緑豊かな森林こそ、もっとも大切な地球の資源であると思う。

まず、森林は生物多様性の源である。特に熱帯雨林には実に多くの生き物が住んでいて、複雑な生態系を形作っている。森林の伐採によって熱帯雨林の生態系が崩れることは、地球にとって大きな問題である。私達が利益のためにたくさん木を切り倒すことが、生態系を狂わせ、生き物を絶滅させて、結局は気候や食料や資源の面で自分達を困らせることになるということをおぼえてはならない。また、森林と密接に関わりながら生活している人々もいる。森林のことを良く理解している地元の人々は、むやみな伐採などは決してしない。工業国に住む私達が、そのような人々の生活を壊していいはずがない。

現在減少傾向にある世界の森林を守るために、「ソムニード」の植林等の運動に協力してみたいと思う。また、それだけではなく、普段から鉛筆を無駄にしない等、エコロジーな生活を心がける必要がある。このような私達個人の努力とともに、企業でも森林の伐採を最小限にしてほしいと思う。規制を設け、木材の需要もそれに合うように皆が節約すれば、森林の減少を止められるかもしれない。

03)平成 25 年度宮高 1 年 S さん(豊間根中 1 年) 『3. 11 から三年目の今、私ができること』

現在、私達がすべき復興への手助けは、一番はまず「伝える」ことだと思う。アチェの地にある『津波博物館』や、『ノアの方舟』で助かったガヤさんの語り部としての活動のように、後世に残せる形で伝えていかななくてはならないと思う。私は中学3年生の時、近い将来に大地震や大津波が来ると言われている和歌山県に、被災地の学校の代表の一人として講話をしに行ったことがあるが、やはり私達が身をもって痛感した悲しみや辛さ、震災への備え方は、できるだけ広める必要があると思う。

二番目は、「切り換える」ことだと思う。アチェの人々は、大災害を神様の恵みとして受け止め、プラス思考で前に進んでいる。「日常への感謝」や「たくさんの人との出会い」は、あの災害があったからこそ在るのである。命や大切なものもたくさん奪われたが、得たものも少なくはない。

そして、三番目、「返す」ことにつなげることが必要なのだ。「今までの分」「これからの分」、私達が大災害を経験し、学んだこと、活かされたこと、失敗したことなど、全てを他の人の役に立つように使い、恩を返すのだ。

資料を読んで、文化は違っても「思いやり」や「助け合い」の精神は、どこにでも同じく存在していることを知った。文化や国境を越えた思いやりや助け合いの輪は、無限に広がると思う。そしてそれは今、私達がやらなくてははいけないし、私達が広げていくべきだと考える。

04)平成 26 年度宮高 3 年 K さん(吉里吉里中 2 年)『3.11 から四年目の今、私ができること』

東日本大震災から今日まで、様々な節目で「今の自分にできること」を考えました。その末に辿り着いたのは、「今を一生懸命生きる」ということです。具体性がない、と言われるかもしれませんが、私はこれが「今の自分にできること」であり、「やらなければいけないこと」だと思います。

震災で私たちは多くのものを失いました。未だに戻ってこないものも沢山あります。「明日やろう」と思っていたことができなくなりました。「当たり前だ」と思っていたことの大切さに気がつきました。今、生きているということが、どれだけ恵まれているのかを感じました。それゆえ、私たちは何をやるにせよ、この一瞬一瞬を全力で生きていかなければならないのです。震災により命を落としてしまった方々の分も、有意義な人生を送らなければなりません。

私たちが今を懸命に生きることは、将来の社会貢献にもつながります。震災での経験を活かし、未来を創り上げることができるのは私たちです。しかし、「一生懸命」というのは決して簡単なことではありません。辛いときも疲れてしまうときもあると思います。そういう時こそ、東日本大震災を振り返り、忘れないようにすることが大切だと思います。

震災前、当日、直後、全てを知っている私たちだからこそ創り上げることのできる未来を、一生懸命築いていきたいと思っています。復興に役立つ人間に成長していきたいです。

05)平成 26 年度宮高 3 年 I さん(津軽石中 2 年)『東日本大震災を後世に伝える方法』

3月11日の大震災から4年、様々な復興活動が進められ、だんだんと震災の被害を受けた人々の気持ちの持ちようも変化した。当時と比べると「震災」や「津波」という言葉も減少し、あまり聴くこともなくなった。この現状は良いことだと思う反面、津波の恐ろしさやその後の辛い日々の経験の存在が薄くなってゆくのは、後世へ伝える上では問題があるように思う。

大震災を後世に伝える方法として、津波到達地点の碑を建てたり、津波に関する歌を作成したりと様々な方法がとられているが、私はその中でも、被災した建物をそのままの状態で保存することが、後世の人々に最も効果的に津波の恐ろしさを伝えるのではないかと思う。おそらく話を聞いたり写真を見ただけの知識では理解することのできない波の破壊力や圧倒的な存在感を、被災した建物を見た人は目の当たりにするだろう。現に私も、震災から大分落ち着いた頃、田老へ行く機会があったため「たろう観光ホテル」が周りの草木から独立して独特な雰囲気醸し出していたのを見たが、そのことにより再度津波について考えさせられた。きっと、忘れかけていた恐怖も、二度とあってほしくないという願いも、思い起こしてくれる存在であるのだと思う。

後世に伝えるためには、写真や動画なども良いだろうが、このように実物として残しておくのはとても大切なことであると思う。

06)平成 28 年度久慈東高 3 年 S さん(小 6)『3.11 から 5 年を経た今、私ができること』

3月11日から五年経ち、この地震、津波を経験し、備えると言うことが大切だと感じました。当時は、そのような事が自分の周りで起きるなんて考えてもいませんでした。停電や食料不足など、苦痛な数日間を過ごしたので、もしもの事を考えて準備する必要があると感じました。

「ここなら大丈夫だろう」と自分勝手な判断をしていると、いつか大変な目にあってしまうと思います。避難をしろという放送があった場合、迷わず、できるだけ早く避難することが大切だという事を学びました。

東日本大震災では、多くの方がボランティアで募金をしてくださったり、炊き出し等たくさんの方の援助をして下さりました。私だけではなく、とても感謝している方々がたくさんいらっしゃると思います。数ヶ月前、熊本県でも大きな震災がありました。少しでも困っている方の為にボランティアに行きたいと強く思いました。

この震災で学んだ地震や津波の怖さを忘れず、反省すべき点を反省し、自分の命を自分で守ることができるために訓練などを積極的に行っていく必要があると思います。そして、それらを伝えるために、教育テレビなどで子供にも分かりやすいようにアニメを作ったり、どの世代にも興味が持てるように工夫したCMなどを作っていくこと等が大切になると思います。一人でも多くの命を救えるよう、今できる事を精一杯頑張っていきたいと思っています。

07)平成 28 年度山高 3 年 S さん(山田南小 6 年)『3.11 から 5 年を経た今、私ができること』

震災当時、私はまだ幼かった。町では煙があちこちから立ちのぼり、店や家などは跡形もなく崩れ、本来の山田町の姿ではなくなっていた。また、私はこの震災で母を亡くし、前に進むこともできないままとなった。そんな時、私を支え、励ましてくれたのが、家族、友人、他の県の方々、そして外国からの支援だ。

たくさんの方々から支援され、その中で一番心に残っているものは、手紙だ。手紙には励ましの言葉などが書かれており、そのおかげで辛く苦しい日々を乗り越えることができた。また、地域の方々ともお互いに支え合いながら過ごすこともできた。

震災から五年が経ち、私は今、高校 3 年生となった。この五年間は、長いようで短い日々でもあった。そして、私がこの五年間で一番学んだことがある。それは、人の大切さだ。私は、もともと人見知りで、人となかなか接することができなかった。しかし、多くの方々に支えられていると気づき、そこから私も恩返しのために多くの方々に助けたいと思い、一年生から三年生まで、町で行われているボランティア活動に積極的に参加した。ボランティア活動に参加したことによって、子供からお年寄りまで幅広い年代の方と接することができ、人と接することが好きになった。

元の山田町に戻ることはまだ時間がかかるけど、復興することを信じ、人のために生きていきたいと思う。

08)平成 30 年度山高 1 年 N さん(船越小 2 年)『東日本大震災から 8 年目の今、私ができること』

東日本大震災から、もう 8 年という長い年月が経ちました。当時、私はまだ小学 2 年生でした。3 月 11 日午後 2 時 46 分、あの日あの時間に大きな地震が私達を襲いました。その時、私は学校でちょうど帰る準備をしている時でした。地面全体が大きく揺れ、教室の戸棚や水槽を次々と崩し壊しました。少し揺れがおさまってから校庭へ避難しました。しかし、用務員さんと校長先生の判断でさらに上の方へ避難しました。それからしばらくして大きな音と共に黒い大きな波が遠くから近づいてきました。私達は散らばりながら近くの山へ駆け上りました。運良く一人も犠牲者がいませんでした。山を下って、その日は被害の少なかった近くの家泊めてもらいました。次の日の朝、消防の人と自衛隊の人が来てくれて、水と食料をもらい、家まで送ってくれました。

私は、あの時の経験や学んだ事をたくさんの人に伝えていきたいと思っています。震災でたくさんの人に支援してもらったので、私もそれを別の形で恩返ししていきたいと思っています。特にも、私は震災を通して消防士になりたいという夢ができました。今は、その夢に向かって体力作りを頑張っています。もし消防士になれたら、地元で役に立てるような人間になりたいです。そのために今できることを一つずつ積み重ねていき、全力で取り組んでいきたいです。

09)平成 30 年度山高 3 年 S さん(山田南小 4 年)『東日本大震災から 8 年目の今、私ができること』

『グローバル山田』では、さまざまなことを学ぶことができた。私達が当たり前のように使っている水が、発展途上国の子供達は使うのが難しいこと、プラスチック等のリサイクルがそれらの国ではできないこと、学校の電気が通っていないこと、等々、当たり前私達がしていることができない国があることに、私は驚き、そして、どういう形でもいいから支援がしたいと感じた。

そう感じたのは、私が東日本大震災の被害に遭ったとき、県内や県外、そして台湾やアメリカなど外国からの支援を受けたことが理由の一つである。ノートやエンピツ、クラッカーなどのお菓子も含めて、被災し落ち込んでいた私にとっては、すごくありがたく感じた。しかし、発展途上国で暮らしている人達にとっては、被災した状況のような環境をずっと続けているのと同じだと思った。募金をすることで、水を清潔にする薬をその人達に間接的に送ることができる援助は、すごく魅力的だし、私のような学生や小さな子供も支援に加わることができる。このような支援できる制度をもっと増やすべきだと思った。

私ができることは、そのような間接的な援助に対し積極的に参加することと、発展途上国の子供達の状況をできるだけたくさんの人々に知らせることだと思う。

10)平成 30 年度山高 3 年 S さん(船越小 4 年)『インド洋大津波や東日本大震災を 後世に伝える方法』

2018 年は、記録的な気象現象や地震によって災害が相次ぎ、西日本豪雨や大阪北部地震・北海道胆振東部地震など、自然災害が多かった年でした。八年前私達は大きな地震を体験し、地震後さらに恐ろしい津波の被害を受けました。

『生物』の授業では、インド洋大津波と東日本大震災の比較について、小笠原先生が実際に被災地を訪れ、見たものや感じたものを教えて頂きました。インド洋大津波と東日本大震災で共通しているのは、やはり伝承を後世に残す重要性です。インドネシアでは、津波のことを忘れないように工夫が施されていました。たとえば、津波のことを伝承歌謡にし、韻を踏み覚えやすくすることで、幅広い年齢の方々に親しみやすくし、歌い継ぐことで後世に伝承することが可能になっていました。また、日本で見たことがなかったのは、津波博物館でした。その博物館には写真はもちろん、津波を経験した方から直接話を聴けるスペースがあり、多くの人に知ってもらうことが可能でした。また、津波を経験した人の記憶も、風化することがなくなるのではないかと思います。ですので、私は、「歌」や「博物館」の二つの方法を用いることで、東日本大震災を後世に残せると考えました。そして、震災を経験した私達は、「伝える」ことを大切にし、いろいろな工夫を加えながら積極的に活動していくべきだと強く思いました。

11)平成 30 年度山高 1 年 H さん(山田南小 2 年)『身近な自然環境を活用した 津波への防災・減災』

私は、小学二年生のとき「東日本大震災」という大きな自然災害を経験しました。大きな地震と共にものすごい勢いで津波が町をのみ込んでいく様子を今でも覚えています。

あの日の震災を経験し、犠牲者を出してしまった現実がある以上、次は少しでも多くの命が助かることを考えます。まず、津波から逃げることです。海沿いに防潮堤を造るだけではなく、木を植樹して津波の勢いを少しでも弱めることができますと思います。このようにすれば逃げる時間を少しでも長くできると思うからです。海岸防災林は、さまざまな意味で役に立つから、高い防潮堤を造り壁ができるよりは、自然のものを使うのも私はありだと思います。逃げることを第一にして、そのためには何が必要なのかを考え、自然災害への防災をすることが大事だと思います。

山田町は、山と海に囲まれた自然豊かな町です。津波を経験し、海への恐ろしさはあるけれど、山と海の恵みがあって、おいしい海産物や農産物がたくさん採れます。だからこそ海や山などの自然を大事にしたいです。自然がたくさんあるということは、もちろん自然災害とかもあり、考えないといけないこともたくさんあるけれど、生活環境を豊かにしてくれる自然への感謝を持つことも私は大事なのではないかと考えます。木を切って人工物を造ることも大事だけれど、木を残すことによって森林の必要性を考えることも大事だと私は思います。

12)平成 30 年度山高 1 年 S さん(山田南小 2 年)『身近な自然環境を活用した 津波への防災・減災』

津波を体験した日から、もう長い年月が経ちました。私自身、津波が起こした被害の大きさなどが記憶から薄れていっています。今回この記事を再度読み、新たに感じさせられるものがありました。まず、森がどれ程大切かについてです。森が減ることは二酸化炭素が増えることだから嫌だと思っていました。でも森はそれだけではなく、海の生態系にも大きく関わっています。海へ栄養を与えているのは森でした。森がなくなってしまうと、海の生態系に大きな影響を与えるでしょう。そうすれば私たち人間も困ります。そして森はそれだけでなく、防災・減災にも役立っています。津波が起こった場合、一時的に被害をやわらげ人々や町を守ってくれます。そのため、木を切る行為は、津波の被害を増加させるのと同じ事だと思います。私達山田町の防潮堤は、もしかしたら津波を思いだして嫌になる人もいると思います。だから、森などの自然環境を付け加えるなどの工夫をすれば良いと思います。

森が私達にどのようなものを与え、どれほど大切にされるべきなのか、山等を開発する前にしっかりと考えるべきではないのかと思います。また、日本だけではなく世界中に津波の恐ろしさ、大変さ、苦しさを、私達体験者が伝えていくべきだと思います。

13)令和元年度岩泉高2年 Kさん(小2) 『私ができる国際支援活動』

国際支援活動という言葉が高校生になってから聞く機会が増えました。私も少し興味がありましたが、学生の私にできることがあるのだろうか、という考えから自分には関係のないことだと思っていました。

調べてみると、私にもできそうなこともありました。書き損じハガキ、使用済み切手、絵本を集めたり、募金などです。書き損じハガキ集めは岩泉高校も取り組んでいる活動ですが、私は一度も参加したことがありませんでした。しかし、書き損じハガキは私が想像していた以上の価値があることを知りました。タイやラオスでは250枚で子どもが一人、一年間学校に行くことができるそうです。岩泉高校の生徒全員が一人2枚ハガキを集めれば、一人の子どもが一年間学校に通うことができるということになります。岩泉高校はとても素晴らしい活動をしていると思いますが、私たちに書き損じハガキについての知識がないため、集まりにくいのだと思います。国際支援活動について知る機会が増えれば、書き損じハガキなどの活動に協力してくれる人も増えると思います。絵本なども貧困地域では貴重な勉強道具になります。捨てる前に、寄付しようと思います。

今回、国際支援活動について調べて、自分にもできることがあることを知りました。できることから協力していこうと思います。また、他の人にも広めていきたいです。

14)令和2年度宮古北高3年 Iさん(小2) 『身近な自然環境を活用した防災・減災』

身近な自然環境を活用した防災・減災について、私はこれをもっと増やすべきだと思います。日本は年間を通して、様々な災害が発生する国です。中でも、毎年必ず日本に上陸する台風と、地震による津波への防災が重要と考えます。

強力な風と大雨をもたらす台風は、年々被害が大きくなっています。これに対して活用できるのは「森」だと思います。森は、自然のダムとして一定量の水を貯えることが可能です。また、木の根が地面を押さえているので、土砂の流出を抑えることもできます。

次に、津波に対して活用できるのは、資料にあるように「海岸防災林」だと思います。津波の威力そのものを弱める他に、物や人が海に流されにくくする効果もあります。災害を無くすことができないけれど、減らすことはできます。様々な災害に対応していくことが大切です。

そして、この防災の重要なところが「自然である」というところです。人工物でもこのような効果のある物を造ることもできますが、植物を用いることで、環境を破壊することなく、むしろ生き物が生きていくための手助けにもなります。自然環境を破壊しないこと、そして自然を増やすことが大切なことだと考えます。

これらのことから、私は身近な自然環境を活用した防災・減災を増やすべきだと思います。

15)令和2年度宮古北高2年 Yさん(小1) 『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

東日本大震災から10年が経とうとしています。私は小学生の時、未来の田老を題材にした劇をしました。中学生の時は、「田老を語る会」をしました。「田老を語る会」では、被害状況や当時の様子・教訓などを、津波を経験したことのない人に伝えました。私ができることは、考えて、伝えていくことです。「田老を語る会」は、現在の中学生も行っています。私はそれをこれからも続けていってほしいと思います。

私は震災で家族を2人亡くしました。当時まだ小学校1年生だった私は、そのことがよく理解できずにいました。ずっと2人の帰りを待っていました。そのことを思い出して泣くことが時々あります。亡くなった人のことを思い出すことも私にできることの1つです。たとえ亡くなっていたとしても、私の思い出の中で生きていてほしいと思うのです。

私は絵を描くことが好きです。昔から絵で好きなものを表現することが好きでした。私はいつか、もっと絵を描く技術を上げて綺麗な田老の海を描きたいと思っています。現在の田老はお店は建ってきましたが、まだ人が少ないと思います。田老の魅力を知り、それをたくさんの人に広めてほしいと思います。私も自分の絵で田老の魅力を伝えられるように、田老の事をより好きになりたいです。